

RISTと歩んだ30年を振り返って

熊本大学 大学院先端科学研究部長・工学部長
RIST顧問・相談役(前会長)

宇佐川 毅



平成23年3月11日は、早稲田大学理工学部で開催中の日本音響学会春季研究発表会に参加しており、高層階で開催されていた会議に出席しておりました。会議中の2時46分に非常に大きな揺れを感じ、会議を中止し直ちにテレビをつけました。暫くの間、テレビから流れる情報にくぎ付けとなっておりましたが、尋常ならざる事態に学会の中止、解散を会長が判断されました。神戸大学の先生と二人、運よく乗車できたタクシーで羽田空港に向かったのですが、歩道も車道も大渋滞で、タクシーもガス欠を心配して手動のアイドリング・ストップを余儀なくされるという状態でした。運よく搭乗できた熊本便の機内で、同僚や学生の心配、今後の支援の方法を考えるとともに、九州の地にも大きな影響があることを覚悟したことを鮮明に記憶しております。しかし、その後福島第一原子力発電所の被害が日に日に拡大していく様を知るにつけ、その影響の大きさがどれほどなのか、自分には全く想像ができませんでした。

平成25年度から2年間、村山伸樹先生の後継として、会長を務めさせていただきました。熊本知能システム技術研究会の会員となったのは、発足から程ない時期だったと思います。当時熊本の半導体関連事業は隆盛を極めており、RISTに対する第一印象は、なんと活気に満ちた会だろう、というものでした。その後RISTの活動は大きく展開し、会長をお引き受けした時点の総会では、月例・地域フォーラムは276回(H25.4.18)を数え、その年の10月には2年前の東日本大震災を踏まえ「熊本型減災体制の構築」と題したRISTシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは決して、平成28年4月の熊本地震を予見

したものではありませんが、熊本での防災体制を考える機会の一助になったかと思います。その一方、東日本大震災の影響から、RISTの事務局体制・存在意義・期待される役割の見直しを、否応無しに求められることとなりました。RISTは設立以来、熊本県・熊本市や公益財団法人くまもと産業支援財団、産業界の大きな支援の中で、「くまもと」による「くまもと」のための産学官連携に取り組んできました。その執行体制は、会長・副会長・幹事会・企画委員会と、それらをしっかりと支えてくださる専任の事務局体制により20年以上にわたり維持されてきました。しかし、東日本大震災の影響が、RISTの活動へも直接的に影響することが、平成24年度には明らかになり、そのような状態のなかで、1期2年間で新しい体制に移行することを最優先の課題ととらえ、会長職を務めさせていただきました。

平成27年度末までに、専任の事務局担当者の配置が難しいことを含め、改めて財政や期待される役割についても検討し、財団のご厚意やこれまで諸先輩方に築かれた熊本県・熊本市や産業界との堅固な信頼関係に支えられ、大きな混乱もなくRISTの活動継続のための基礎部分を整えることができました。

RISTの30年は、自分自身にとって、ここ熊本での30歳から今日まで時間を紡ぐ一本の太い糸のように感じております。多くの先輩方のお力で支えられてきたRISTを、次の30年に繋ぐことで、若い力をここ熊本の産業界に展開いただくことをここより祈念しております。